

## 『JR上野駅公園口』

2020年12月14日

私は神学生時代、学部4年間は、東大農学部前の西片町教会に通い、大学院の2年間は上野駅前の下谷教会に通った。教会を変えた理由は、友人から下谷教会は多様な人々が来ている教会であると聞き、そのような教会を経験したいと思ったからである。確かに、多様な若い人々の集まりがあった。一般サラリーマンの「青年会」、女性事務員の「BGGグループ」、大学生の「学生会」、そして、集団就職で上京した人の「勤労者クラブ」などがあった。それぞれ、個性的な交わりを形成していたが、「勤労者クラブ」の青年たちから熱心で誠実な求道の心を学んだ。神学校を卒業し、下谷教会に伝道師として赴任したが、鬱病になり、教会に十分な奉仕ができなかった。4年間在職したので、合計6年間、上野、浅草、山谷界隈を歩き回った。上野駅は常時、利用する駅で、色々な思い出がある。

柳美里氏の『JR上野駅公園口』が全米図書賞を受賞し、注目を集めており、また、私には上野駅が懐かしく、読んでみた。2017年に単行本として出版されていたが、受賞を機に、河出文庫の2020年12月23日6刷発行を入手した。上野駅公園口は、音楽ホール、美術館、博物館、動物園などに行く改札口で、何度通ったか知れないが、上野恩賜公園の表面だけを見ていただけで、歴史や出来事を知らずに過ごしていたかを、本書を読んで、思わされた。また本書は、現在と過去が飛び交い、耳慣れない、途切れた言葉が多く、更に、仏教の教えなどが説かれ、日本人でも分かり難いと思われる。英語の翻訳は大変だろうと想像し、これを受け止めてくれた米国人の心の奥深さに敬服した。

小説はホームレスを核にした物語である。主人公は、1933年、平成天皇が生まれた同じ日に、福島県浜通りの相馬郡に生まれた男である。結婚して、一男一女を得る。主人公は出稼ぎのため上野駅に着き、東京オリンピック競技場の建設工事で働く。長男は、令和天皇が生まれた同じ日に生まれ、「浩宮」の幼名にちなんで「浩一」と名付けられる。彼は21歳の時、東京の間借り部屋で亡くなる。浄土真宗に基づく葬儀が、土地の風習に従って行われる。長女は結婚し、子どもを得る。その子は、後に津波に飲まれて、命を落とす。主人公は出稼ぎ期間が多く、妻との生活は極めて少ない。妻が亡くなり、長女の家族に温かくされたが、故郷を去り、上野に向かい、ホームレスとなる。ホームレスは、言わば、社会から脱落した人々で、帰る所も、居場所もなく、都会を放浪する人々である。食べ物と寝場所を得ようと、日々歩き回っている。その生と死は儚い。親しく飲み交わした友人が突然、死に見舞われる。こどもたちから「コヤ」に火がつけられ、石を投げつけられて殺される。何のために生き、何のために死ぬのかが分からない。柳氏は、ホームレスの実態を克明に調べ、報告している。彼らの存在は、高度経済成長の下で、日本社会の光が影を生み出したと、高みからは分析できるが、人間の生死が奪われている現実に胸を突かれる。

本書の深いメッセージは天皇制に向けられている。主人公は平成天皇と、長男も令和天皇と同じ日に生まれている。そして、天皇は事ある毎に言葉を発し、天皇の存在感を浮かび上がらせている。皇族関係者が上野の美術館や日本学士院に来た時は、「山狩り」と言われる特別清掃が行われ、ホームレスになった主人公たちは、立ち退きを命じられる状況が描かれている。彼らは何の不満を言うこともなく、黙々と命令に従っていく。そして、沿道の人々は、微笑む皇族方に手を振って歓迎する。「解説」を書いた政治思想史の原武史氏は「現天皇と現皇后のほほえみの裏に隠された権力にこれほど迫った小説を、私は少なくとも平成になってから見たことがない」と書評している。柳氏は、天皇制の下に呪縛されている日本人に対し、あなたの生はどこにあるのかと問いかけていると、私は読んだ。